

火災シーズン

がやってきました

火事を防ぐのは

ひとりひとりの、心がけ以外にありません。

もう一度

あなたのまわりの、火を使う場所を見てみましょう。

家庭でも

火災予防の計画をたててみましょう。

ひとりがひとつ火の始末

随想



芽生え

杉本 泉

庭の鉢には散りかけた菊の根本から新しい芽がのそぎ、先日まで穂りの秋を飾っていた田んぼでは、まっ黒く耕やかされた土を割って青い麦の芽が伸びている。やがて春ともなれば見渡すかぎり緑が芽をふき、背伸びでもしたい心身の躍動を覚えている。

私はこれらの芽生えを見ると、若い力、特に仕事の関係からか農村の若い人々を常に連想する。ところが非常に残念なことに現在農村の青年層は減っている。その原因については、今更私が云々するまでもないが、農業地域は一般経済の発展から多かれ少なかれ取残され、また農家は保有地が狭いうえに分散しているため、いくら経営に励んでも、それ相応の経済効果を得ることが出来ない。したがって最も活動的な青年層が、後進農業地域から離れて、仕事も生活も楽な、また労働報酬も比較的高い都市に走っているのである。

しかしながらこのような現象は、農村にとっては勿論のことだが、国家的社会的にながめても、決して好ましい現象ではない。そこで近年農業構造の改善事業が強く叫ばれ始めたのであるが、私共農政担当者としては、経済的・社会的・技術的条件の変化に対して、如何にして農業構造を適応させるかということに日夜頭を悩ましている。

土地基盤の整備や生産の選択的拡大、農業経営近代化施設の導入、流通の合理化対策、農業団体の強化、草地樹園地等の造成による規模拡大、農村の環境整備等いろいろの仕事をそれぞれの担当課で推進してもらっているが、私は最終的には、立派な農家をつくる。立派な農業者をつくる。いわゆる農村の人づくりが土台になると考えている。

このような考え方から農村の人づくりに対しては、経営伝習農場等の生徒に対する直接教育の他に、いね、酪農、養鶏、養豚、果樹、園芸、養蚕、農業機械等の部門毎に生産技術研修、農村教育青年会議、営農研修学園や、県教委、NHKと共催でラジオ農業学校等を開設したり、教育庁及び農業高等学校校長会等との連携を密にしているところである。

現在県下の農業研究クラブ員は約二万名を教え、自主的な主婦の生活改善グループが約五百で会員一万三百名、4日ク

ラブが百団体で二千五百名の人々が熱心に研鑽されていることは非常に心強い。

特に昭和三五年から、県、熊日、農業団体と共催してきた農業経営コンクールで、三五年第一位の御船町豊秋酪農グループ、三六年同牛深市浅海みかんグループ、三七年同旭志村妻越酪農グループのその後の伸びが喜ばしい。

更に三八年から農業自立経営部門と新人王部門を加えて発展的に切替えた農業コンクールで、三八年農業新人王秀賞となった水俣市開拓地の岡田哲也君、三九年同西合志村の園田錦一君は、全国経営者発表会（東京）および毎日農業コンクール（仙台）で、わが家の農業経営を発表し、また、七城村隈部忠宗君は全国農村教育青年会議の実績発表会でいづれも全国一位に選ばれるという壮挙をなして、熊本県農業の面目を躍如した。

前記三君だけでなく、三八年優賞の菊陽村の酒井君（酪農）本渡市の菅原君（みかん）、熊本市の林田君（米、そさい）三九年同八代市の福田君（そさい）、本渡市の吉田君（みかん、豚）等々農業コンクールに上位入賞された諸君の経営は、若々しくしかも自らの意欲を燃やした企業的设计は実にすばらしい。

そして、そこに新しい農業への力強い芽生えが感じられ、また、このコンクールに参加する新人の数と質は年を逐うて向上するのが本場に頼母しい。

農業は、かつて瑞穂の国の名のもとに国民の食糧を賄って余りがあった。又戦後荒廃の中で国民食糧の需要に汗と努力で応えて来た。そして今経済発展による国民の新しい食生活に支えながら、自らの生活を高めなければならぬ重要なときに直面している。ここに農業が馬鹿では経営できない理由が、納得できるであろう。

これらもろもろの困難を勇敢に排除して、若い芽生えはぐんぐん成長しつつある。私は、この若い芽の成長を妨げぬようまた、側面からこの成長の促進に心魂を傾けねばならないと痛感している。

（県農政部長）